

「グリーン・ウォール」の創生
グヌングデ・パングランゴ国立公園
住民参加型森林再生プロジェクト

現地からのお便り

2011年8月10日
コンサベーション・インターナショナル

森林再生事業の進捗

2008年から3年間にわたり進めてきた森林再生プロジェクト「グリーン・ウォール」プロジェクトは、2011年6月から、さらに3年間継続されることとなりました！これまでの3年間で、200ヘクタールの土地に8万本の自生種と1万本の果樹が植えられました。これからの3年間で、これらの苗をしっかり管理するとともに、新たに100ヘクタールの森林を再生する計画です。また、コミュニティの生活を改善するため、きれいな水や電気をコミュニティに届ける活動も始めます。

7月、インドネシアは乾期に入りました。しばらくの間、苗の植え付けと植替えの作業はできません。地元のコミュニティ、国立公園スタッフ、地元政府と今後3年間の活動について相談する集会を重ねています。また、新たに追加する100ヘクタールの土地の調査を始めました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

環境教育

森林を育て、守るためには、ここに暮らす人々の理解と参加が最も重要だと私たちは考えています。4月から6月には、地元の学校に加え、2つの集落を訪問し、ビデオを活用して森林保全の大切さを伝えました。合計で150人の住民が参加しました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

また、4月22日のアースデーに合わせ、ボドゴール教育センターで、小学生を対象とした絵のコンテストを開催しました。グヌングデの山の森は、この地域に暮らす人々に水をもたらしています。小学生たちは、絵を通じて、森林を守ることの大切さを学びました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

生物多様性の調査

グヌングデの森は、ジャワ島に残された貴重な熱帯林。ここにしかない動物たちにとって、まさに最後の砦です。水をはじめとした様々な恵みを私たちに届けてくれる森は、木々だけで成り立っているわけではありません。花粉やタネを運ぶ動物、葉っぱを分解する菌類や虫がいなければ、森を形づくる木々はいずれ消えてしまいます。そして、そういった木々を支える生き物も、他の生き物を必要としています。

この森を守るため、この森を動物たちがどのように使っているか知ることが大切です。私たちは、ジャワヒョウに焦点を当て、国立公園スタッフと協力して調査を進めてきました。今後、ジャワギボンも調査の対象に加える計画です。集められた情報は、国立公園の管理に活かされています。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

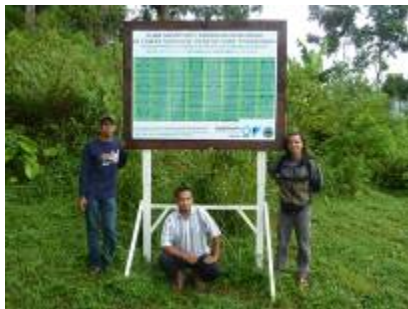
地元コミュニティの生活

5月、プロジェクトの活動地域であるナグラク村の人々の生活を調査しました。大部分の家族が国立公園内の土地に依存し、農業を営んでいました。主要な農作物はキャッサバです。

プロジェクトでは、これまでも栽培されてきたキャッサバなどの短いサイクルで収入をもたらす農作物に、長期的・持続的に収入をもたらす果樹を組み合わせた「アグロフォレストリー」を導入しています。収穫される果実が地元コミュニティの生活を豊かにする助けとなるよう、今後、地元コミュニティが必要な技術・能力を身につけるお手伝いをしていきます。

看板

5月、エアコンを通じて環境へ貢献をされているお客様の名前入り看板が、新しくなりました。より多くのお客様の名前が入った新しい看板の前を、毎日、植林地管理や農作業のために人が行き来しています。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

※画像および文章の無断転用はご遠慮下さい。